

研究通信

№ 67

1969. 9 月刊
村落社会研究会
事務局
関西学院大学
社会学部内

村研第一七回大会について

余 田 博 通

昭和四十四年度大会に関しては、研究通信で報告したように準備を進めてきたが、事務局を引き受けた関西学院大に学園紛争が再発し全共同による長期の全学完全封鎖という事態となつて、大会準備に最も大切な時期が大学改革準備と対策との時期と重なつてしまつた。さらに各地の各大学にも紛争が統発し、一時は秋の大会が開催不可能となるのではないかと心配もした。このような状況で、共通課題の部は実現が困難になつて、自由発表のみにせざるを得ないと思つたか、しかし何かに焦点をおかせたいと事務局は考え、運営委員の方々に相談もせず申訳ないが、大会開催場所が丹波篠山だから、近畿北部農山村特集を計画し、お願いした。第一日の午後がそれである。

自由発表を含めて、研究対象は北海道から九州に及び、また中世から現在に至る村落である。第二日の共同討議は、従つて散漫になることを恐れる。

そこで共同討議のテーマとして、非常に大きな問題であるが、社会的に表現すれば、「村落社会の変動」というようなこと

を考えてはと思うのであるが、どうであらうか。今回の諸発表によれば、一つは、近畿北部村落の中世から近世を経て現代への村落の社会変動、いま一つは現在における村落の社会変動に焦点がかわせられよう。

甚だ勝手な提案をして恐縮であるが、共同討議を果のあるものにしたと念願するからである。いずれにしても共同討議の発題を下さる方は、至急事務局まで御申出下さるようお願いする。とりわけ運営委員の方々の御意見をいたゞきたい。

第一七回大会プログラム

一〇月一日（水）

〔午前の部〕 9・00 — 12・00

開会の辞

報告 司会 牧野由朗 村長利根朗

1. 中屋紀子・宇田川順子

〔道北農村に於ける農業と農民の問題 — 名寄市智南地域
の事例から — 〕

2. 林 雅孝

〔新しい農村 — 山口県秋芳町中辺部落の事例 — 〕

3. 長谷川昭彦

〔農村における自動車の普及の影響 — 伊賀上野近辺の
農村について — 〕

〔午後の部〕 1・00 — 5・00

司会 安孫子麟 菅野正

4 松本通晴

〔近畿北部村落における株・マキ・親方子方〕

5 竹田聰洲

〔一六世紀 墓碑初現形態と村落構造の地域差〕

6 岡 光夫

〔篠山藩における村方騒動〕

7 米村昭二

〔祭祀組織と村落構造 — 旧梶並庄を中心とする甲国山地の実態 — 〕

総 会 5・00 — 6・00
懇 親 会 6・00 — 9・00

一〇月二日（木）

〔午前の部〕 9・00 — 10・30

報告 司会 服部治則 川越淳二

8 土居 平

〔長崎県上五島における相続慣行〕

9 内藤莞爾

〔鹿児島農家の末子相続〕

共同討議

（1） 10・30 — 12・30
（2） 1・00 — 3・00

大会会場案内

名 称 国民宿舍 ささやま荘
住 所 兵庫県多紀郡篠山町王地山公園
郵便番号 六六九一二三

電 話 篠山（〇七九五五）②一―一二七
交 通 国鉄 福知山線 「篠山口」下車

（篠山口より篠山線にのりかえて「篠山」で下車する方法がありますが、運転回数が少ないのでご利用されたいよう願います。）

(1) 国鉄バス「本篠山」行乗車 — 十七分 —

「本篠山」下車、徒歩五分。交通費四〇円。

（神姫バスには乗車されないようご注意ください。）

(2) 篠山口よりタクシーで約一〇分。（多紀タクシー）

交通費四六〇円

なお、宿舎は午後一〇時よりチェック・オフで閉門されますので、それまでに到着されるようお願いいたします。

国鉄 福知山線 時刻表
（10月1日より実施）
大阪発 篠山到着

急 丹波1号	8.55 — 10.15
急 たせん1号	9.50 — 11.07
急 たせん51号	9.56 — 11.34
急 丹波2号	13.50 — 15.06
急 たせん2号	14.50 — 16.05
急 丹波3号	17.03 — 18.28
急 丹波4号	19.40 — 21.04

（これ以後の列車では宿舎のチェック・オフまでに到着できません。）

大会参加経費案内

大会参加費	500円
懇親会費	500円
宿泊費	600円
朝食・昼食費	各150円
夕食費	350円
奉仕料	110円

(懇親会にご出席の方は懇親会費とは別に夕食費をいただきます)

大会参加申込受付報告

大会参加申込みは八月三十一日の締切り後も続いています。宿舎の都合から十月二十五日以後の変更はできませんのでご容赦下さい。九月十六日現在では次の通りです。

宿泊申込数

九月三〇日	四十三名
十月一日	六十九名
十月二日	三十七名

〔第一七回村研大会報告要旨〕

道北農村に於ける農業と農民の問題

— 名寄市智南地域の事例から —

北大 中屋紀子
名寄短大 宇田川順子

今回研究対象とした「智南地域」は、道内穀倉地帯の一つである上川盆地の北上約八〇Kmに位置する名寄市に属する。名寄市中心部から約九Km天塩川流域に沿った智恵文村に隣接した谷あいの農業地域である。ここは米作北限地帯であり、小規模な畑作農が多く、輪作もできず地力の消耗が激しく、旧くから問題化している地域の一つである。ピート、馬鈴薯を中心とする畑作、ビニールハウスで野菜づくりを主とする畑作、自給的米作が加わる場合もあり、又一方 米作中心、あるいは 畑作又は米作に酪農が加わった形態、更には、酪農中心、そしてわずかな山林を持つ場合もある、という様に経営の形態は雑多である。それ故農業生産再生産のもつ問題、労働力の再生産の問題も多様である。故に問題解決の方向も混沌としているようにみえる。そこで私たちは、第一に、国の農業政策と密接し、北海道にあっては重要な意味を持つ総合開発行政の中でこの地域のもつ問題を把握することにした。

戦後の農業は、食糧自給、人口吸収の開拓行政下で緊急開拓を中心とした農業政策がおしすすめられた。三〇年以降の高度成長期に入り、酪農振興、工業原料としての農産物の高生産性、土地改良等が唱えられ、智南地区でも小家畜をはじめ、無牛農家への貸付牛制度の実質化による小家畜+乳牛一・二頭飼養農家が続出した。(畑作の問題を放置したままで……)

そして天塩川流域綜合開発が行われたが、護岸工事にのみ限定され、冷害時の「救農工事」としての役割を果たしたにすぎなかつた。

農基法農政下の第二期北海道綜合開発期に入り貿易の自由化による農畜産物価格の低落、大規模農家の育成政策による小家畜、畑作への圧迫は著しい。パイロット事業として、丘陵地の草地化も行われてきたが、結果として経営形態の複雑化、多様化を招来した。

第二に、現段階での生産の問題を考えると開発行政とのかわり合いの中でもつとも深刻な問題は、土地問題——農産物価格とのかかわりから生ずるものである。——即ち、土地の生産性の低下、土地拡大、資金の問題としては、資金導入の見込み、導入後の見通し等々……、市場問題、水問題等にもつともよくあらわれると考えられる。

第三に以上の土地問題、資金問題の農業生産の場面での具体的現われが問題となる。特に、労働力流出のもとでの機械化のたちおくれ、人口老令化、それらが更に前述の複雑な経営形態を生み出し、今後の農業生産の行方を見失なわせることになつてゐる。同時に、このことは、健康破壊、主婦の労働過重等のこの地域での農民自身の再生産、即ち農民としての生活を維持しうるか否かの判断を更に強く迫られるということも意味するものと思われる。

私達は、ここでの実態調査を通して、今後の道北農民の問題

説明の方向を考えてゆきたい。

新しい農村

—山口県秋芳町中辺部落の事例—

山口女子短大 林 雅 孝

目次

- 一、序
 - 二、部落の概要
 - 三、住民意識
 - 四、新しい傾向とその意義付け
- 附章 観光の社会学への一つの試み

海に面しない美禰郡秋芳町のカルスト台地秋芳台と秋芳洞は、世界的規模の自然景観であり、かつ景勝であるが、それへの観光の流行が、この地域に新しい社会変動——特殊富裕地域が発生とその成長——を生ぜしめた。その度合は、産業開発による、孤高的、富裕町村である和木村や南陽町にも対応している。

もちろん、その変化は、町内ではとりわけ台地や洞の近くに育成された商業地帯や町中央をふくむその近接部落においてい

ちじるしい。特殊な自然景観に立脚した公園経営主義的傾向な
いしは商業化の進行ともいえようか。未来社会のテーマである
「農村公園化」の新しい特殊型がここにはある、ともいえ
るであろう。

全体として、かゝる特色を持つ当町の中で今回採つた中辺部
落は、町の中央や洞、台地を離れ、西北部奥深くにあり、この
様な変化の故は直接にはおよばない。しかしながら、今回のテ
ーマである観光地帯の周辺部落へのその浸透過程においては興
味ある現象もみられる。

とりわけ、本論においては、(1)台地や洞の観光の流行はどう
影響しているか。(2)なかならず、産業開発と趣を異にする公園
経営的商業主義化の隆盛——観光開発——は、農村の近代
化、農業の商品化経済の進行過程で、特殊加速的プラスの要因
となつているか。特殊(秋芳型)価値体系の発生はみられない
か。(3)裏返しの観察でもあるが、農業構造改善事業——農村
の近代化の進行状況はどうか。特殊な事実はみられないか——
など観光開発地域の一周辺村落への波及過程の解明が、検討さ
れるべき論点である。

なお、本論の主旨は、事例報告であるが、最終的には「観光
の社会学」への一つの準備過程としての意義をも内包している。

農村における自動車の普及の影響

—伊賀上野近辺の農村について—

明治大 長谷川 昭彦

自動車時代と称されるように現在の日本において自動車普及
はめざましい。急速なモータリゼーションの波は全国の自動車
用の高速道路網の整備発達とあいまつて農村地帯にも及び、農
村生活に大きな影響をあたえている。

この報告は、昭和四十三年八月、伊賀上野近辺の三重県阿山
郡大山田村の甲野、畑村の両部落、および上野市中瀬地区につ
いて、自動車を所有する農家を選び、自動車普及の影響に、関す
る面接調査をおこなつた調査報告である。

昭和三十九年に完成した大阪と名古屋を結ぶ(厳密には天理市と
亀山市とを結ぶ)名阪国道は、大阪商圏と名古屋商圏との中間点である
伊賀上野の街に沿つて伊賀盆地を縦貫している。このような道路
は都市と都市とを結ぶというだけでなく、農村を都市に結ぶと
いう機能を果している。農村における自動車の普及は一方にお
いては生産の場である圃場と生活の場である農家とをより近接
せしめる機能を持つていることはいうまでもないが、他方では
都市と農村とを結ぶ可能性を現実化するものである。すなわち、
農村における自動車の普及は、第一に限定され封鎖されていた
農村住民の従来の行動圏をより拡大し、大都市や地域的中心都
市への連絡をいし依存性をより強くする。第二に、例えば農村

後継者問題にあらわれるような農村の都市との隔差意識を變更させ平準化する傾向を作る。第三に、現在の自動車普及が貨物車よりも乗用車への志向性をもっている限り、生活費への圧迫という現象がみられ、また、道路や交通安全施設の發達が及ばない限り、事故などの公害の問題が新しい問題を醸成してくるのである。

近畿北部村落における

株。マキ。親方子方

同志社大 松本 通 晴

(一) かつて竹田聡州氏は民俗学の立場から、「祭祀の共同は同族結合の営む諸機能のうち最も本質的なもの一つである」として同族祭祀をとりあげ、しかし「同族研究の初期の資料は東北地方や信州、甲州など」に多く、「同族祭祀は畿内に果して存在しないものかどうか」と問い、「どの学問分野からも比較的等閑に付された観があつた」として、これにこたえて近畿二府六県（含福井縣一部）、全町村一、四九五（回収率約六割弱）に対して郵送調査を試み、「近畿村落における同族祭」資料^{*}を提供して、その資料検討から次のように結論づけられた。すなわち「近畿の北部山岳地帯たる丹波・丹後を中心とした両丹地方には同族結合とその共同祭が意外に濃厚に分布する一方、同じ近畿周辺の山岳地帯でも南部の紀州諸郡にはそれがほとんどみられない……畿内平野部……

対象の地域が広く村数の多いにかかわらず、同族祭祀の報告例は著しく少なく、その点極めて対照的であつた」とされた。

※ 昭和二五年、二六年の調査報告。「近畿村落における同族祭・兩墓制・屋敷神の分布資料」(一)(二) 同志社大『文化学年報』第十二輯、第十三輯、昭和三八年、三九年。

(二) そこで筆者はこの竹田氏の「結論」をうけて、次の四つの点においてさらに展開を試みようとしたのである。

(イ) 筆者は「同族結合とその共同祭の濃厚に分布する」とされる丹波・丹後を中心に、若狭・但馬も加えて、これらに調査対象地域を限定した。そして竹田氏の行政町村単位の調査にかわって、大字単位の調査（総数二、三七二うち市街地等を除き郵送分二、一四三（回収率約六一％）で同族結合を明らかにすることにした。

(ロ) しかし調査にさいしての項目は竹田氏のそれに多く依拠して、その後の一八年間における変化を大雑把ながらもつかむことができるように配慮した。

(ハ) さらに筆者の調査では、親方子方の慣行についても調査することにした。それは但馬においてその慣行の存在が著しいものと指摘されてきたからである。

(ニ) 以上の点をふくむ筆者の郵送調査から、近畿北部村落における同族結合と親方子方慣行とが傾向的に明らかにされるであろう。それ故に既存の個別論文や地方誌もこ

の傾向性をふまえて正しく位置づけることができると思
う。

(三) もちろん竹田氏の場合も、筆者の場合も、郵送調査にもとづ
く傾向性の把握にとどまるものである。したがって村落構
造の中でのそれら同族結合と親方子方関係の正しい位置づ
けは個別村落調査にもとづくものでなければならぬ。そ
のためには筆者は京都府北桑田郡山国村の事例において同
族結合を、また京都府与謝郡野田川町龜山の事例において
親方子方関係を、既存の諸研究も参照しながら報告するも
のである。そしてこれらのことから何らかの問題提示がで
きればと思う。

※ 同志社大人文研編『林業村落の史的研究』ミネルヴァ
書房、昭和四二年刊 参照。

一六 墓碑初現形態と村落構造の地域差

同志社大 竹 田 聰 洲

村落社会の性格や構造は時に墓の存在形態の上に鮮かに投影
される。墓そのものは村の生活に不可欠であるから、古い村で
は仏教が入る以前から存在したことは自明であるが、村の墓制
史にとつて最も一般的かつ最も顕著な画期のメルクマールとな
るのは石碑墓の出現である。在地(フィールド)の文献・伝承・
景観など総合的な資料条件如何によつては、遡史的分析を介し
て、該村落に墓碑が始めて出現し、後世の惣村入会墓の原核が

形成された当時の実態をある程度追跡的に復元しうる。石碑は
墓の歴史的形態であり、その初現は村の墓制史の史前と史後
との分岐点であるが、我々が試みた一・二の実態調査によれば、
その初現は一六世紀(戦国期)、村の個戸が石碑をもつように
なるのは一九世紀(近世後期もしくは近代)以後であつて、そ
の以前は共有もしくは共用であつた。その所有もしくは使用の
共同は、村の構造において同族の比重が大きいか、講組の比重
が大きいかによつて著差があつたが、それは石塔個々の容姿の
みならず、村内におけるその存在形態の上にはしばしば鮮かに反
映するといふよりも、むしろ逆に、追跡復元しえた初現期の石
碑の存在形態から、同族的な村と講組的な村との類型差は、一
六世紀中葉の畿内(東大和)及びその周辺(口丹波)にすでに
徴しうるのではないかと考えられる。

(丹波)

(現京北町)

同族村の一例：京都府北桑田郡山国村大字中江・大字比賀江

集落としての現大字はそのまま中世の禁裡領山国庄(柚)に遡
る。山村である。中世以来山国庄傘下の各「村」は数姓の名主
家とその「同名衆」・「被官」を根幹としたが、「名」(みよ
う)の同族的経営は中世もすでに早くから崩れていた。しかし
中近世を通じて旧名主仲間を中心に強固な惣庄官座を持続した。
墓碑の初現は永正(一五〇四)・享祿(一五三六)。比賀
江では一個の惣村入会墓として、中江では、村内に散在する名
主持庵に名主家墓が憑着する形で出発し、のち持庵陶汰の結果

最有力な名家単独の持庵即持墓と惣入会墓とに分化。しかし初期には、石碑造立は名家のみに行われ、惣村入会といつても諸名家の個人墓の共存地として初現し、之が名主同族団の共同詣墓の意味をもつた。次述大和の如き庶民共同碑はここでは終始皆無に近い。

(現都^{つげ}祓村)

講組村の一例：奈良県山辺郡^{つげ}野村大字吐山^{はやま}

(現状の講組的構造は県教委刊都介野綜合文化調査報告(昭26)所収蒲生正男氏の作業に詳しい)。中世の吐山庄。地侍吐山氏の根拠地。近代の大字は七つの「^{かいと}垣内」村から成る。「垣内」は村内の下位地縁でなく、それ自体が一つの村である。江戸時代には垣内毎に庄屋以下の三役を出し、夫々が両墓制と会所寺の所持主体。石碑の初現は天文(一五三二)・永祿(一五五八)。地侍吐山氏の持寺では天文以降連続して個人碑を造立。各垣内では永祿中一斉に各一基の庚申講碑・念仏講碑として出現、爾後近世まで垣内の共同墓碑であつた。

篠山藩における村方騒動

同志社大 岡 光 夫

篠山藩の「全藩一揆」は、享保二年から始まり、同十三年を経て寛延元年、二年とつづき、明和八年のピークをもって一応終りをつけ、前後五回を数えている。その後、明治二年の「世

直し一揆」にいたる一世紀間は、万延元年の一揆を除いて、直接領主に對抗する形をとらず「村方騒動」としてあらわれている。

本報告は、村方騒動を篠山藩政史の上から、意義づけることにする。論点の要旨は次の通りである。

I 全藩一揆とその後の新局面

A 貢租の減少傾向とあらたな対立

1. 地主制の展開と地主・小作の対立

2. 下層農民層の下昇と、それに伴う対立

3. 領主の対応と農民との対立

(1) 貢租増徴への努力(寛延二年の一揆)

(2) 萱・竹・銅葉・薪・松茸運上・御下草運上・炭穴亀運上等の徴収

(3) 酒造出稼人への課役(明和四年の対立)

(4) 御頼銀(寛延元年↓明和八年↓明治二年)

(5) 銀納価格(差銀)の上昇(宝暦三年↑明和八年↓

明治二年)

4. 手形上打と商人との対立(万延元年一揆)

B 農民意識の高揚

C 農民直訴の容認

II 村方騒動について

A 村方騒動の形態

B 破風争論

C 大山上村における村方騒動

1. 大山上村と園田家

2. 文政十二年の騒動

3. 天保四年の騒動

D 世直し一揆への展望

祭祀組織と村落構造

― 旧舘並庄を中心とする中国山地の実態 ―

岡山 大 米 村 昭 二

近世に入ると、かつて花園制というウェールに蔽われていた村落が歴史の表面に登場し、氏神を村落生活の中核とし、シンボルとするに至つた。

しかし、後進地域に属する岡山県北部の中国山地では、名を構成単位とする祭祀組織がかなり残存していた。元祿四年の作陽誌によると、美作一円の三一六社のうち一村氏神が一八四社（五八％）あるのに対して、庄氏神一八社、郷氏神八社を数えている。知見の限りでは、そのうちの一五社は名を祭祀組織の基礎単位としている。

もともと、祭祀組織は、それ自体極めて伝承性が強く、変化を受け入れない伝統の容器といわれる。このことが、中国山地の後進性といひまつて中世的な祭祀組織を今日に持越したものと考えられる。

しかし、近世村落の自立にともなう名の分解に応じて、名を構成単位とする祭祀組織も村落単位に再編成されて村落の連合体的組織へと近世的変容を遂げていつた。

しかも、中国山地の村落は、同族日株内を主要な構成単位としていたことから、単一同族支配型、複数同族支配型といつた構成型態をとり、それがそのまま祭祀組織に投影され、その支柱となつていつた。いうまでもなく、同族は、超世代的な本来の系譜関係をもち、それ故に同族関係は安定度が高く、その内部秩序も容易に変化を受け入れない。したがつて、同族組織を基盤とする祭祀組織も安定度が高く、それによって旧慣を保持しつつ持続して来たといふことができる。

ここでは、そうした名単位の祭祀組織を村落構造と関連させて近世以降今日に至るまでの変化を問題にすることにしたい。ただ、大学紛争のため、史料を十分整理するだけの時間的余裕がなく、問題点も多く残されているが、すでにとりあげた旧舘並庄の祭祀組織を中心に論議を展開することにしたい。

村研年報 予告

村研年報第五集は目下図版の校正がほぼ完了し、本文の校正に入る段階にきています。

研究叢書第一巻（岩本氏論文）とともに大会までには刊行できる見透しです。

村研年報 第五集予告 目次

牧野由朗 「戦後におけるカツオ・マグロ漁業の展開と村落の変容」

布施鉄治 「拠点工業化地域における農村社会変動と農民」

柿崎京一 「農家生活の構造的変化に関する考察——機械化実験村落における一〇カ年の変動分析——」

鎌田哲宏 「開拓村落における農民層分解と社会関係の変容過程」

安原茂 「共同課題「村落社会の変化に対する推進力」の論点をめぐって」

研究動向

史学・経済史学 矢木明夫

経済学 常盤政治

社会学 田原音和

社会人類学 蒲生正男

新入会員紹介

林 雅孝 山口県立山口女子短期大学
宇部市小串尾崎

中屋紀子 北海道大学大学院

札幌市新川四九九 豊栄荘

会員名簿訂正

白樫 久 北見市公園町一四三 北見工業大学宿舍

三谷鉄夫 札幌市屯田三条二丁目六一

鳥谷部仁 新潟市粟山三五六

蒲生正男 東京都世田谷区代田四一―一六

木下謙治 代田セントラルマンション四〇二号

中野哲二 鹿児島市下荒田町四七〇 鹿大下荒田宿舍四一

上田喜三郎 鹿児島市真砂本町四八一―一

松原治郎 東京都新宿区淀橋五五九

多々良 翼 東京都北多摩郡久留米町下里一四三七

安孫子 麟 福島県会津若松市南千石町八一―二

齊藤吉雄 小樽市最上一―二一九

中村治兵衛 仙台市長町越路一九一七六六

退会会員

中村治兵衛

なお、左記の会員のご住所をご存知の方は事務局までお知らせ下さい。

河津哲也、守屋嘉美、園田恭一、丸山学、榎本宗次、橋本梁司、小林茂、高木幹夫、田中幹夫、根岸義夫、奥田和彦、

松村安一、舛田忠雄、山口光男

会費受入報告

年月日	氏名	金額	納入済年度
四四、六、三〇	林 雅孝	二、〇〇〇	四四、四五（四六年度の 内六〇〇円納入済）

第一七回大会参加者一覽（順不同）

小池基之、川越淳二、川本彰、後藤和夫、柿崎京一、島崎稔、
田野崎昭夫、蓮見音彦、松原治郎、菅野正、安孫子麟、黒崎八
崎次良、斎藤吉雄、牧野由朗、服部治則、村長利根朗、鷹田和
喜三、武田良美、白樫久、中屋紀子、福井春美、米村昭二、林
雅孝、長谷川和彦、宇田川順子、松本通晴、二宮哲雄、大沢敏
子、永山栄子、若林敬子、阿部とし子、牛島盛光、花島政三郎、
土居平、内藤亮爾、安原茂、鷺谷苑子、森靖雄、安川実、多々
良翼、矢内諭、鎌田哲宏、今泉芳邦、舛田忠雄、不破和彦、吉
沢四郎、東敏雄、野々村良恵、米地実、細谷昂、中野三郎、戸
谷修、青井和夫、酒井恵真、坂井達朗、鈴木勇次、清水由文、
ジャンジロー、ラジムラ、大淵英雄、戸沢行夫、宮崎俊行、島本彦次
郎、岡光夫、竹田聡州、矢谷慈国、吉田正、余田博通、光吉利
之

（夫人同伴一名、計六十九名、九月十六日現在）

会費納入について

会費の入金状況が思わしくなく、財政事情が非常に悪化して
おります。大会に参加されない方々も、ふるって納入下さい
ますようお願いいたします。

編集後記

各地の大学紛争と事務局の関西学院大の紛争とで、大会開催
が不可能になるのではないかと心配しましたが、皆様のご協
力でなんとか開催にこぎつけることができました。事務局の
活動が思うにまかせず、種々の手落ちがあり、ご迷惑をおか
けしたことをお詫びいたします。

このような状況の中でも本年度大会を成果のあるものにした
いと念願しています。

会員の皆様の一層のご協力をお願いする次第です。